九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

〈翻刻〉『伊勢物語当流私』（一）

坂本，信道
九州大学大学院博士課程

https://doi.org/10.15017/15485

出版情報：文獻探究. 23, pp.30-47, 1989-03-20. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

〈翻刻〉『伊勢物語当流私』（一）

坂本信道

【凡　例】

一、九州大学附属図書館蔵『伊勢物語当流私』（五四五イ三五）上下二冊を翻刻する。原本は、縦二十五・六センチ、横十七・六センチ。墨付上巻七十四丁、下巻九十丁。一面十一行、和歌は二字下げ二行書き。

一、下巻末に、「寛永十三年（一六三六）極月十九日二書畢」とある以外、書写者・書写状況については不明である。

一、翻刻にあたっては、用字・仮名遣は原本に忠実であるようにつとめ、不審と思われる箇所もそのままとした。ただし、字体は常用のものに改めた。

一、虫損等により判読の困難な箇所は□で表し、一部補読した。

一、定家本の章段による見出し番号を付し、また私意に句読点を施した。

一、改丁は「」で示した。たとえば、「（122ウ）」とあるのはそこまでが十二丁裏であることを示す。

一、本文と別筆の書き入れは掲げなかった。

初段　過去人はおほくありといへとも、なりひらをむかしおとこといふ事、一せつ二てうのきさきをおかし奉るゆへ、えいりよにふかくそむく間、なりひらといふなのりをはゝかり昔おとこといふ也。また一せつには、なりひらしやうわ八年三月廿一日にけんふくの日をとりあてゝ侍る間、むかし男といふ也。廿一日とかきて昔とよむ故也。又一さいの物かたりのはしめに、むかしといはてかなはぬ也。しかれは、むかしかかる男のありつるといふへきために、むかしおとこといふ也。うゐかふりとは、なりひら十六のとし（1オ）」かふりをきそめてけり。しからば、しよくわんとかきて、うゐかふりとよむ也。此ときはさこんのしやうけんといへる也。ならのきやうしるよしとはちきやうのよし也。是はなりひらせんそよりつたへる地行なり。かりにいにけりとは、たかかり也。おとこになり、かとくになをるに、ちきやうとはかりいひつたへて、こさい知らぬもしとけなし。又しさいたつぬるも、くんしのいをさくるなれは、たかかりとこうしてくたれは、ひけうにはなくして、さいしよのつもりを心得る也。いつれのくんしのたかにすかるゝも此心也。いとなまめいたる女とは、ありつねのむすめ也。はらからすむ（1ウ）」とは、きやうたいすむ也。此おとこかいま見てとは、此女をかきのひまよりなりひら見はしめられたり。おもほえすふるさとにとは、わかちきやうにもかかる女のありけると、中将をとろかれたり。いとはしたなくてあるとは、はしたの物にはあらす、くらいあるおんなゝれは、りんたんにいても人のしらぬはことはり也。心ちまとひにけりとは、ちうしやうのかくこたへいるはかりに此女を見そめられたり。かりきぬのすそをきりて哥をかくとは、たかかり俄なる事なれは、りやうしもとゝのはされは、かりきぬのすそにかゝれたりとおほへたり。口伝に云、（2オ）」かの女のかたへふみをしたゝめ、なりひらといふなのりをかくへきとおもはれつるか、女は心ふかきやうにてしとけなき物なれは、ふみはふんちつある物なり、なりひらとなのりをかきては、ちむしやにおよはす。又女にははからぬてきの侍ればなのりをさしおき、いるいのはをもつてなりひらとしられへきためにかりきぬのすそをきりておひにつゝけて此哥をかきてやられたり。しのふすりのかりきぬとは、紋にしのふをつけ

たるかりきぬ也。

かすか野のわかむらさきのすりころもしのふのみたれかきりしられす(2)」

五もしにかすかのとをかれたるは、ならのきやうにてよむ哥なれは也。女をわかむらさきにたとへたる事也。まついろは五もしにきをもちいたる物也。五色のほかなれは、女もかくのことく、女はけいつをもつたへぬ物也。ゑんにまかせて、たかきいやしきにさたまらすちきる物なれは、むらさきにたとへたり。今日此女を見はしめてより、忍ふおもひの心のみたれかきりしられす。うちつけよりかくのことくみたれては、わか心すゑにはいかはかりみたれへきと、此女にわかおもひをつけられたり。をひつきてやるとは、たうりうには、かいま見てそのまゝ哥を(3オ)」うちへやりたるによりて、おつつけといふへきを、おいつきてといへる也。こちうのせつには、かすか野の哥は、かりきぬのすそをおひにつゝけて哥をかきおくると也。なりひらのかすかにておひつかれたる事也。しうけん也。つらゆき此事を哥によめる。

たな引ておひをそつけるかすか野のわかむらさきのころもかりかね

かりかねのおほく行は、おひをつきたるやうなり。又なりひらかすかにておひをつきたるなれは、つらゆきかくのことくよめる。つゐておもしろき事とおもひて、きのありつねのむすめ、かわらの(3ウ)」左大臣のよまれたる哥をとりあはせて返哥にをよふ。

みちのくのしのふもちすりたれゆへにみたれそめにし我ならなくに

これはなりひら、しのふのみたれかきりしられすとよまれたるを、此女、われゆへに心のみたるゝといふはいつわり也、たれゆへにかみたれにし、われにてはあらしといふ事を、我ならなくにと、いかにもけんそに返ししたり。いちはやきとは、さうそくとかきたり。みやひは、やさしき也。十四、十五の女の、ほんかをとりあはせ返事をしたるは、ま(4オ)」ことにいかにもさうそくにやさしき心はへをあらはしたり。

第二段　ならのきやうはなるゝとは、くわんむ天わうの御時、ならの京をすみすて、たいらのきやうへみやこをうつされける事を、ならのきやうはなるゝといふ也。此きやう人のいゑさたまらすとは、みやこうつりのはしめなれは、たいりも人のすみかもととのはさる事也。にしのきやうとは、なかをかのこと也。たいらのきやう人いのとゝのはねは、まつみかとなかをかに三とせすみ給ひし也。しかれは、みかとのましますところ、きやうといはてかなはさ(4ウ)」る也。なかをかといふへきをにしのきやうといふ也。此女は二てうのきさき、なからのきやうの御むすめ也。よひとにはまさるとは、きさきの御くらいよひとには似す。これはくらゐをほめたる事。女は又くらいよりもかたち心をほむる物なれは、さてこそ、そのひとかたちよりは心なんまさると、きさきをるいなくほめたてまつる也。ふんしうにいはく、かたちにはふつうあり、心にふとうなし。かたちはたかきによらす、そめんなる物もあり。こころはくらいほとさたまりたる物也。ひとりのみもあらさりけらしとは、これはせいわ天わうのきさきに(5オ)」さたまり給ふ也。まめおとことは、まことのおとこといふ事也。うち物かたらふとは、ものこしに御ことはなとかゝりたるは、きさきの、なりひらに御ことはをかはされたり。これよりして見はしめたてまつり、かへりてとは、大りよりしゆくしよへかへりたる事也。きさきのおもかけをわすれかたくおもひて、やよひのついたちあめそをふるにとは、雨のつよくおちそひ〳〵ふる事也。

おきもせすねもせてよはをあかしては春のものとてなかめくらしつ

おきもせす、ねすは、よるひるのおもひふかけれは、(5ウ)」おきもせす、ひるの事也。ねもせぬはよる也。おもひにあくかれは、おきふしもならさる事也。みかとをはるのみやと申奉るにより、みかとのきさきとはかりなかめくらしてよりそふ事なき

を、春の物とてなかめくらすといへる也。かくのことくかなはぬ事に心をつくすは、こひのみちのならひ也。

第三段　昔おとこけさうしける女とは、おもひかけたる女の事也。これは二てうのきさき也。ひしきもといふ物をやるとは、かいそうにひしきといふ物あり。是をきさきへしんする也。さまをかへいくたひも物をおくるによりて、あしき物よき物をきらはすしん(6オ)」するは、ふかくおもひ奉るゆへ也。又一せつには、女のまへは、からふみのそうしやは、人しりよするによりて、なにゝても物をそゆれは、なかたちはやし。此きにまかせて、ひしきによらす、なにゝてもふみにそへられたり。

おもひあらはむくらのやとにねもしなんひしき物にはそてをしつゝも

むくらのやとは、人のいていりあるましき所也。しかれとも二なくおもひあらは、むくらのやとなりともねもしなんといへる也。かゝるところはしき物もあるましけれは、ひつしく物にはそてをしつゝも(6ウ)、」おもひあらはねもしなんとよめる。むくらのやとになりひらゆくへきと、ひけしにはあらす、ほんかにも見えたり。なにせんにたまのうてなも八重むくらはひらんやとにふたりこそねめ。かくのことくむかしもいへり。二てうのきさきたたふ人にてましますとは、くらいにもつかてへい人の御ときなり。

第四段　おほきさいのみやおはしますとは、そめとのゝきさき、せいわ天わうの御はゝなり。にしのたいにすむ人あるといふは、二てうのきさき、たうくうの御すまひにて、くらいにもつかせたまはすして、かん(7オ)」この御すまひなり。ほいにもあらぬとは、ほんいにはあらさる也。なりひら、二てうのきさきへみつたう申也。しからはほいにはあらぬ也。心さしふかきとは、こひのみちをなかたちとする也。む月の十日はかりは、正月也。ほかにかくるゝとは、にしのたいに二てうのきさきおはしつるか、大りに御うつりまします事、ほかにかくるゝといふ也。ありところはきけときんちうの事なれは、行かよふへき事にもあらす。又のとしのむ月とは、二年めの正月也。かのきさきのましましたるにしのたいを、せめてきさきの御かたみに見てなくさみたけれと、(7ウ)」これもさいくいていりせはあたなたつるへし。梅の花さかりに、むめをかことにてにしのたいを見る也。はなはいかやうに見ても人のとかむるにをよはす。遥見人家花便入、不論貴賤与親疎をかくのことし。しからは梅の花をかことににしのたいのいていり、なもたゝさる也。いきてとは、にしのたいへゆく也。たちてみいてみとは、にしのたいへまいり、きさきとむかひ奉りつるまねをして、たつついつなけく事也。しかれともきよねんに似ぬとは、きさきもましまさゝるゆへ也。あはらなるいたしきとは、けんそうくわうてい、やうきひにわかれて、きひ一人なけれは(8オ)」くうてんらうかくにあらすとなけき給ひしことく、なりひらも、たまのうてなもきさきましまさねは、あはらなるいたしきとおもひたるもことはり也。月のかたふくまてふせりて此哥をよむ。

月やあらぬ春やむかしのはるならぬわか身ひとつはもとのみにして

是はけんそうくわうてい、やうきひにわかれての御ことはに、やうきひ一人なけれは、月も月ならす春も春ならすと御なけきのことく、なりひらも、きさきのましますときは月も月なり、花のはるも春也、いま此にしのたいはきさきましま(8ウ)」さねは、月やあらぬといへる也。又はるも春ともおもはすなみたをそゝく也。かくのことく月も花もむかしにかはるに、わかみはかりありかいもなくむかしのまゝなれは、わかみひとつはもとの身にして、月も花も昔ならぬと、なりひらのなけきことはりなり。

第五段　五てうわたりにいとしのひて行とは、なからのきやうの御もとにきさきのましますほとに、こゝへ忍ひてゆく事也。いとしのふとは、二となく忍といふ事也。みそかなるところとは、いかにもひそやかなる所也。是はなからのきやうの御事なれは、(9オ)」くわんはくのすみかにて、いかにもみそかにすま

るゝなり。かとよりもいらて、わらはへのふみわけたるついちのくつれより、ゆきかよふ也。此かよひちは、人のゆきゝもしけくなけれは、なりひら一人かよふ也。しからは、たひかさなれはあるしきゝつくるとは、なからのきやう、なりひらかいていをきこしめしつくるなり。

人しれぬわかかよひちのせきもりはよひ〳〵ことにうちもねなゝん

うちもねなゝんは、うちもねよかし也。わかかよひちのせきもりなれは、よくもねいりたりとも(9ウ)」さたする物あるへからす。しかれはよひ〳〵ことにせきもりもねよかし也。あるしゆるしてけりとは、まことにゆるすにはあらす。哥にはおにかみもやはらくといふ事侍れは、ちうしやうわかかよひちのせきもりとよまれたるを、なからのきやう此哥にやはらき給ふゆへなり。せうとたちとは、きさきの御きやうたい也。此せきもりをよにんにいひつけらるれは、きさきのなもたつほとに、きやうたいたちせきもりとなり、ついちにたゝれたる也。

第六段　女のえうましかりけるとは、ゑかたき女なり。是は二てうのきさきに、なりひらけねんをかけしに、(10オ)」きさきのくらいになり給へはなりひらゑかたきなり。としをへてよはひけりとは、としをへて忍ふ心也。からうしてぬすむとは、しんらうの事也。いとくらきにきけるとは、よるの事也。又きさきの事なれは、せちやうのおそろしき事をも、くらきといふ也。あくた川は、きんちうにあり。くさのうへにをきたるつゆとは、きさき、いまたほかを御らんせすして、まんきちやうのうちにこもり給ひしゆへ也。はしめてこよひくさはを見給へは、まへ〳〵くさはを御らんしなれさるゆへ也。ゆくさきおほくとは、ちうしやうのすみかまてはるかなり。(10ウ)」しかれはよもふくる。きさきは御ともしたり。なりひらせんかたなきに、きさきはくさのうへにをきたるつゆをとひ給へは、なりひら、なんきのちふんなれは、へんたうにをよはす。おにあるところともしらぬとは、きんちうにおにのまといふところ、ねんちうにたひせちふんの夜よりほかは人ゆかす。しかれともなりひら、これへきさきをかくし申ゆへ也。かみさへいみしうなるとは、らいてんの事にはあらす。きさきのうせ給ひたるによりて、きんちうさはきつようする也。かのあはらなるくらは、おにある所也。かのところにきさきをしかくし(11オ)」申也。おとこゆみやなくいをゝきてとくちにをるとは、此きさきをとられしとちうしやうの心のいかる事を、ゆみやなくいをおほふとかきなしたり。きんちうはゆみやなくいいる事なし。おにはや一くちにくふとは、おにのまにおき奉きさきを、ものゝふ共とりてかへれは、きさきうせ給ひし也。しかれはおにのま一くちにかまゆるによりて、をにはやくいてけりといふ也。あなやといひけるは、きさきもなりひらも、あなかしとなけき給ふ也。かみなりさはきに、えきかさる也。かみなりさはきは、つはものの(11ウ)」つようする也。此さはきによりて、なりひら、二条のきさきのなけき、たかいにきこへす。あしすりをしてなくとは、なりひらふしまろひきさきのわかれをなけくなり。

しらたまかなにそと人のとひしときつゆとこたへてきえなまし物を

たうりうのせつには、くさのうへにおきたるつゆはなにそと、きさきのとい給ひしとき、つゆとこたへて消はつへきを、なからへて此わかれを見る事よと、こうくわいの心をつゆとこたへてきえなまし物をといへる也。こちうのせつには、みな人むまれたる時たまのことくと人にいはれしとき、なにの心もなく(12オ)」きゆへき物を、かゝるとしまてなからへうき事を見つる、あさましきとくへてよめる。

いとこの女ことは、そめとのゝきさきに、つかうまつるやうにてい給ふとは、いとこなからせうとはゝにてましませは、おそれ給ふ事を、つかうまつるやうにてとあり。かたちのめてたくましますとは、きさきの御かたちたくひなき也。おいていつるとは、きさきをうしろにおひ奉るゆへ也。御せうとゝは、きさきの御しやきやうなり。おとゝとは、なへて大しんのからなを

いふ也。御なをはくにつねと申。大なこんまたけらうとは、大納言のくらいになるへき人、くらいにつき（122ウ）」給はぬを、下らうといふ也。しかれはかのくにつね御子ともからなれは、うちへまいり給ふとは、きんちうのきさきの御さところへ御まいり也。いみしうなく人あるとは、そめとのゝきさき、二てうのきさきをなりひらにとられ御ひたんの事也。それを大なごんきゝつけ給ひて、おにのまにましますきさきをとり給ひけれは、それをかくおにといふ也。きさきのまたわかくとは、おさなき事也。

第七段　むかしきやうにありわふるとは、えいりよにそむくあひたみやこのうちにすみかたし。あつまへ行とは、とうりうには、しきにおんこくの事也。（133オ）」こちうには、ひかし山にいたる事をあつまといふなり。まつひかしへ行は、いせ、おはりをとをるなれはほんのまゝ也。なみのいとしろうたつを見て、うらやましくもかへるなみかな、波はかへる、われはこめんあつてみやこへかへるへき事ふちやうなり。しかるにうらやましくもかへるなみかなとなり。

いとゝしくすきゆくかたのこひしきにうら山しくもかへるなみかな

猶又こちうのせつには、いせ、おはりといふ事、二てうのきさきの御きやうたいくにつね、もとつね、くにつねをはいせのかみ、もとつねをはおはりのかみ也。此ふたり（133ウ）」のあひたになりひらかくれすむ也。しかれは伊勢、おはりとかきたり。なみのいとしろうたつは、人のいちやはくはつといへるも、物おもふときよりもおこりたり。すき行かたのこひしきは、これは物ことに昔をおもひいたす事かすく也。うら山しくもかへる波とは、おいの波はかへる也。われわかきにかへる事なけれは、うら山しくもかへる波かなとよめる。

第八段　きやうやすみうかりけんとは、もとよりえいりよにそむくゆへ也。ともとする人ひとりふたりとは、きのありつね、たいらのさたふん、りやう人なから、なりひらのえいりよにそむかるゝをあはれまるゝ事（144オ）」なれは、かくのことく一人二人といふ也。しなのゝくにあさまのたけにけふりのたつを見て、

しなのなるあさまのたけにたつけふりをちこち人のみやはとかめぬ

わかむねのうち、みやこにしなくのきやしや、ふうりうの人のことおもへは、ふくちうのもゆる事、あさまのたけのけふりにをとらす。あさまのけふりをは、おちこち人いかなるいはれととかめてとをる也。わかふくちうのもゆるをは、えんきんしたしき人も、まことのときをはとかめてたつぬる人なし。さてこそおちこち人のみやはとかめぬと、あはれまぬと（142ウ）」うらみてよめる。

第九段　もとよりともとする人とは、ありつね、さたふん也。みちしれる人もなくて行とは、あつまはをんこくなれは、せいたうをおこなふ人もなけれは、しゆきやうのみはよこしまなる事もやあらんと心ほそくと也。こちうには、さまくのおもひあるといへとも、こひのみちほとあはれなる事なけれは、こひのみちをは人のにくむにてとて、ふひんともなきを、みちしれる人もなくてまよふとをく也。みつゆくくもてとは、くものては八ある物也。しかれは此みつ八人のきさきにわかれしなりひらの、な（145オ）」みたのみつのこほるゝを、みつゆくかはのくもてといふ也。はしを八わたせるとは、なりひらなれにし人はあまたあれとも、まつ八人へつしておもふ人あり。そのわかれをおもひわたるといふ事を、はしを八わたせるといふ事也。八人の女のしたい、二てうのきさき、きのありつねのむすめ、こまち、いせ、たかやすの女、つくもかみ、そめかはの女、すきこ、八人さたむ也。そのさはのほとりの木のかけにをりゐてとは、たひの事なれはおりいてあそふていなり。かれいひくふとは、たひにてくふいひをは、かれいひといふ也。やかてもちには、せうはんとかきてかれいひとよ（152ウ）」む也。たひにてことたらぬを、たひのならひとしたり。此すくなきいひを、なり

ひらきのかけにてくふ事、これところをきらはすかれいひくふは、たひのならひ也。昔かうとくのみやも、あふみのくにかいつにおゐて、せきやうとこ給へは、かいつのもの、かうとくのみやを見奉りて、つねのきもつにはにあはすとて、しいのはにいひを奉りけれは、かうとくのみやの御哥に、いゑにてはけにくふいひをくさまくらたひにしあれはしいのはにもるとあそはしたり。しかれはなりひらか、きのかけにていひくふ事、ひきやうにあらす。けにくふいひとあ（164オ）」そはしたるは、しゆくしよにをゐては、とゝのへてけつかうなるいひをけにくふとあそはしたり。たひなれはしいのはにくふと、あはれにあそはしたり。ある人のいはくとは、みかわのくにの物の事にてもあるへし。又一人二人のありつね、さたふんか事にてもあるへし。かきつはたといふ五もしを句のかみにすゆるとは、哥は五くの物なれは、一字つゝ句のかしらにをく也。かくのことくよむを、おりくのうたといふ也。

からころもきつゝなれにしつましあれははるゝ〳〵きぬるたひをしそおもふ（165ウ）」

から衣は、いるひにとりてもいちやうなり。かくのことくから衣きつゝなれにし、きやしや、ふうりうのつましみやこにあれは、あとに心のひかるゝによりて、一ほもさきへすゝむ事、心にたらす。さてこそ、たひははるゝ〳〵きぬるをよろこふに、是はたひおしそおもふと、みやこに心のひかるゝゆへなり。なみたおとしてほとひにけりとは、なりひらかくのことくよまるゝ哥をきゝてさきへゆく事をやめ、なりひらをとゝめたる事を、ほとひにけりといふ也。わかいらんとするみちほそきとは、一天下ひろしといへとも、えいりよにそむけは、みのをきところせはき也。うつの（167オ）」山の事なれは、つた、かえてのはしけるとかきたり。すゝろなるめを見るとは、おもひのほかなるをんこくなりとなりひらなけかるゝ也。しゆきやうしやあひたり、此しゆきやうしやは、二てうのきさきの御しやてい、れんしゆくほうし也。かかるみちはいかてかいまするとは、しゆきやうしや、なりひらをみて、かゝる御やうたひあはれなりと、なりひらをとふらふ心也。きやうにその人の御もとゝは、二てうのきさきの御もと也。ふみかきてつくとは、二てうのきさきへ、かのしゆきやうしやに、なりひらふみをまいらせらる。

するかなるうつの山辺のうつゝにも（172ウ）」ゆめにも人にあはぬなりけり

きさきにわかれ奉りてのちは、いかやうのものにも、われふしゆくすると、御きしんあるへし。うつの山辺のうつゝにも、よの人にはあはぬ也。かりにゆめにもうつゝにも、きさきよりほかは見奉らすと、きさきへわか心のとうかんなきをしらせ奉哥也。又一せつにいはく、われ二てうのきさきにさんくわい申さゝる事は、ゆめにもうつゝにもなき事なるを、人のきよめいを申をみかとまことゝおほしめし、えいりよにそむく事、くちおしきといふ事を、ゆめにも人にあはぬなりけりと、くかいへ（168オ）」ちんする心、又みかとへもつうすへし。しやうくわん十七ねん五月のつこもりなり。ふしの山を見れはゆきいとしろうふれるとは、

ときしらぬ山はふしのねいつとてもかのこまたらにゆきのふるらん

ときしらぬ山は、ふしはゆきのふる山なれは、なつといふときをもしらぬ也。かのこまたらは、しろくあかき物也。ふしのつちはつねにあかし。此うへにゆきのむらきえたるは、ほしのいたるかのこまたら也。又いはく、こちうには、ふしを見れはとは、みかとを見奉れはといふ事也。みかととふしは、三ケ国に（169ウ）」ならひなけれは、みかとをふしにたとへたり。ときしらぬとは、せいわ天わう、うれいもなく三十七としのさかりにゑたいをうけ給へは、ときしらぬみかとゝいふへきを、ときしらぬふしといふ也。かのこまたらは、御代のかはるにつきて、ゑたいとけたるは、いるいもしろく、又御代かはるをなけく人は、にしきのはかまきたる人なともおとろきて、きんちうのさはくやうたい、かのこまたらにゆきのふるらんとよめる。ふし

の山のふんきを人のたつぬるとき、てをあけてもまなふにおよはねは、ひえの山をはたちはかりかさねあけたらんほと也。なりはしほしりのやうなるとは、(19オ)」しほたるゝかこ、ふしの山ににたり。此かこは、いかにも口いかりて、そこほそくなかき也。ふしの山のてい、いかにもそはへひろく、うへはせはくほそなり也。しかれはしほしりをうつふけにほすににたり。すみた川は、むさし、しもつさ、りやうこくのなかになかるゝ也。かきりなくとをくもきぬるとは、なりひら、みやこよりかくのことくをんこくまてきたりたりと、おとろかるゝ事也。わたしもりとは、くわんはくとのゝ御事也。いかにといふに、きみをふねといふによりて、くわんはくは、みかとをすいにあつかふによりて、わたしもりといふ也。はやふねにのれとは、せい(19ウ)」わゝ御代をすへられたり。此たひのみかとへまいれといふ事也。日もくれぬといふは、みかとを月日にたとへたれは、せいわの御代をすへられたるを、日もくれぬといふ也。のりてわたらんとは、又よつきのみかとへまいらんといさむ也。みな人物さひしきとは、御代のかはるをなけくもあり。なりひらはいさむ也。さやうにおもふ人なきにしも、いはんやなりひらはおもふ人きやうにあれは、いよ〳〵よろこふ也。まつとうりうには、かもめをみやことりといふと見えたり。はしとあしとあかきは、かもめのやうたいなり。しろきとりはみかとの御かたちをほめたる也。これを(20オ)」みやことりといふ事は、まつみかとは、かみ十五日まつりことをなさるゝによりて、あしにはにしきのはかま、口にはにしきのくちおほひをめさるゝなり。しかれははしとあしとあかき也。これみやことりのさた也。わかまゝの御あつかひなれは、てんしをとりと申也。ことに此ようせい天わう、せいわの御代をはやくとり給へは、みやことりとやうせい天わうを申なり。みつのうへにあそふは、みかとをふねといふにより、みつのうへはふねのあそふところ也。きやうには見えぬとりとは、きやうにうみなし。かもめはうみによりほかはなし。かもめをみやことりと、とうりうに(20ウ)」いふ也。みな人みしらすとは、此ほとやうせいは、さかの野のおくにましく〳〵て、けふ御くらいまいるによりて、はしめてみやこへいて給ひたり。

なにしをははいさことともはんみやことりわかおもふ人はありやなしやと

なにしをははとは、みやことりといふなのことくならは、二てうのきさきはきんちうにましますか、又いかやうのところにましますといふ事を、わかおもふ人はありやなしやと、みやことりにとはれたり。しきのおほきさといふ事、とうりうには、かもめをいふと見えたり。ふしゆひ也。かもめ、しきよりは(21オ)」るか大なる物也。又こちうのせつには、しきのおほきさといふは、たいとうにしきわうと申わうあり。そのみかと御よをよくおさめ給ふ。やうせいもかくのことく、しきわうにあやかり給へとしうけん申也。

第[illegible]段　むさしのくにまてまとひありくとは、とうりうには、むさしのくになり。こちうは、ありつねはむさしのかみになりたり、それかもとにちうしやうありし事をむさしのくにまてまとふといふ也。そのくににある女とは、きのありつねのむすめ也。ちゝはこと人にあはせんといふは、なりひらはくらいたかけれはむこにあはす。われにさうとうのむこをねかふなり。(21ウ)」はゝなんあてなる人にといふ也。はゝなん人に心つくとは、なりひらくらいたかけれは、あてなる人といふなり。らうほは、女のおもひてになりひらをこそむこにほしけれとねかふ也。ちゝはなを人とは、しやうしきなり。しやうしきのしきのちを、なをとよまする也。ありつねは、わかみのいやしけれは、いやしきむこをとねかふはしやうしき也。はゝなんふちはらなりけれは、此はゝはふちはらのたかみつかむすめ也。しからはわかくらいある物のむすめなれは、又むすめにもくらいあるなりひらをむこにねかふ也。むこかねとは、きようなるむこ也。物をほむるに、しやきんのことくといふ故(22オ)」なり。すむところいるまのこほり、みよしのゝさとに、八月一日にま

つりをする也。此まつりをは、たのものまつりといふ也。
みよしのゝたのむのかりもひたふるにきみかかたにそよる
となくなる
ひたふるとは、ひたすらになひくといふ事也。よるとなくなるとは、ゑんとなくなり。此たのものまつりに、ねんちうにゑんしやを、この日をとしつくる也。よめかむこか、いつれもさたむるところのうらなひ也。まつむこのほしき物には、おとこを二人にんきやうにつくりて、かりかねのこのむゑをかの人形に(222ウ)」もたせて、此あひたをかりかねのめをぬいてとはせて見る也。かりかねのとひつきて、ゑをくひたる人形を、やかてそのかりかねをそへ、むこにおとしつくるなり。ありつねはむこにすへきをいとふ也。らうほはなりひらとありし也。しかれはむこおちつかす、うらなひをもつておちつけへきとて、ひとりはなりひら、又へつのおとこをひとりつくりて、かりかねのこのむゑをもたせたるに、かのかりかね、なりひらのゑをとりたり。さてはなりひらをおとしつくるとて、ふうふなからよろこひ、そのかりかねをしうけんにそへ、なりひらのかたへをくる也。けふよりゑんしやになるうへは、なに事も(223オ)」へつてうあるへからす。ひたふるにきみかかたにそえんとなくなるといひて、なりひらをさためたり。かのむこかね返し、なりひらのことなり。
わかかたによるとなくなるみよし野のたのむのかりをいつ
かわすれん
かりかねのなさけをよろこふ也。さるほとに、かりかねにはうらなひをもつけへし。なを人のくにゝてもかゝることなんやまさりけるとは、なりひらかふちやう心、たこくにてもやまさる也。

第十一段　昔おとこあつまへ行とは、ひかし山へなり。とうりうには、むさし也。みちよりともたちにいひやるとは、さ(223ウ)」まのかみたゝもと也。是をもつて二てうのきさきへ哥をしんする也。

わするなよほとは雲居になりぬともそらゆく月のめくり
あふまて
ほとはくもいになるとは、きさきの御くらいたかくなり給ひし事を、ほとは雲居になるといふ也。かくのごとく十せんにてましませは、われ〳〵か事をおほしめす事あるへからす。しかれはくらいたかき人も月をは見る也。われはひかしのあつまにさふらへは、もし月を御らんせんとき、なりひらのかたより月はいつるとおほしめせ。われも又月かたふかは、に(224オ)」しにきさきましますとそんすへし。しかれはわするなよと、きさきの御かたへ申也。

第十二段　昔男人のむすめをぬすむとは、なからのきやうの御むすめ也。このきさきをぬすみ奉り、むさし野へゆく也。くにのかみにからめらるゝとは、せいわ天わう、なりひらを御せつかんあり。女をはくさむらのなかにおきてにくるといふは、むさしのゝ事なれは、くさむらといへる也。みちくる人とは、くにつね、きさきの御きやうたい、なりひらをうちとめんとて、おいてにかゝり給ふ事を、みちくる人といふなり。此野はぬす人のあるなりとて、くにつね火をつけん(224ウ)」とし給ふ也。此ひつけんとするに、しさひあり。きさきにおもひのひをつけんとする也。そのゆへは、きやうたいたちのいて給ふをきこしめし、きさきもえたつはかりはつかしく、又おもはゆくましますことなり。きさきの御うた、
むさし野はけふはなやきそわか草のつまもこもれりわれも
こもれり
きんちうにむさしのあり。そのゆへは、昔大なごんみさひまろといふものあり。むさし廿四くんをちきやういたし、ゑいくわにありつるところに、えいりよにそむくあひた、此くにをめしはなされたり。しかれはかのみ(225オ)」さひまろ、みやこへのほりさま〴〵に申せとも、御めんなし。是をふうふのものなけくあひた、やまひとなりて、ふうふなからしす。こともをちかつけて、むさしのくにのつちをとりよせ、とさうしてえさせ

は、むさしをもつとおもふへしとゆいこんして、しゝたり。かのこともゆいこんにまかせて、むさしのつちをめしよせ、ふうふをとさうしたり。此ところをむさしのといふ也。又たいりをみやこへうつさるるとき、此の大りの庭になりたり。しかれはひつけんといふことはをうけて、きさきむさしのはけふはなやきそとあそはしたり。此のはむかしより、ふう（259）」ふをとさうして、ひをつけさるところ也。こらいのきをそんして、けふはなやきそ、昔もふうふ、いまわれもなりひらとふうふこもれは、火つくる事やめよといふ御うたなり。

第十三段　昔むさしなるおとことは、ちうしやう也。きやうなる女とは、ゆきひらのむすめ四てうのきさき、中将のためにはめい也。さてこそえいりよにそむくこと、きさきゆへなれは、わかめいにきかする事はつかしき也。又きこえねはくるしとは、ありところをしらせぬもあひたによりて心くるしき也。うはかきにむさしあふみとかゝれたるは、はなれさるあひた（260）」といへる事也。そのゝちおとつれなし。しかれはきやうより女、四てうのきさきの哥、

むさしあふみさすかにかけてたのむにはとはぬもつらしとふもうるさし

むさしあふみとは、もとよりはなれさるあひたといふ事也。かけてたのむとは、たかいにたのみたのまるゝをちとめいのあひたなり。とはぬもつらしとは、をとつれなきときも、なに事かましますらめとおもふときは、とはぬもつらしといへる也。又とふもうるさしとは、そなたはえいりよにそむきたる人なり、われはきんちうにあれは、よをはゝかるによりて（261）」とふもうるさしといへり。うるさしといふ事、兄弟もちたる人はいむへし。昔もろこしに、右大臣、さ大しんきやうたひあり。う大しんはなかされ、さ大しんはしさいにおこなはれたり。しかれはうるさしといふ事おこりたり。おとこたへかたき心ちとは、なりひら返しにをよふましきと思へとも、かくいひをこせたるに、返しをせてはかんにんしかたきなり。さて返哥、

とへはいふとはねはうらむむさしあふみかゝるおりにや人はしぬらん

とへはいふとは、たつぬるときはうるさしといふ。又とは（262）」ぬときは、とはぬもつらしとうらむれは、せんかたもなし。たかひにとひとはれてこそ、とうかんなきいしゆもあらはるゝに、かくのことくいへはくちおしきなり。昔の人のこひにしぬるといふを、いつはりとおもひたれは、かゝるおりにや人はしぬらん、われもいましぬはかりになりたり。

第十四段　すゝろとは、おもひのほかなり。なりひらみちのくまてくたる事、まことにふりよ也。そこなる女とは、へつにいかやうなる女にてかあるらん。せちにおもへるとは、ふたつなくおもへる也。女のうた、

なか〳〵にこひにしなすはくわこにそ（263）」なるへかりけるたまのをはかり

たまのをはかりとは、そこはかりといふ事也。くわこは、かいこなり。もしこひにしにかねうきよにあらは、くわこになるへきと也。そのゆへは、くらいあるなりひらによりそふへき事はをよひなし。されともくはこになりてはやすかるへし。きぬにたになるならは、なにゝなりてもよりそふへし。又ひいるといふむしになりてむまれかはり、とし〳〵のさんくわいもやすかるへし。たまのをはかりほんいをとけ、やかてふつくわにいたるへき也。是はとうりうのき。こちうには、むかしはんこ大わうの御むすめ、るいなき御かたちにてあり（264）」しを、みかとの御ひさうにあしけのむまあり。かの馬ひめみやを見奉りてよしなきおもひとなり、此馬しゝたり。みかとむまのかたみに見んとて、おもてにかはをはらせ見給ふに、あるとき、ひめきみなに心もなく御ゆさんとて、にはへ御いてありけれは、はりつけたるかはおきあかり、ひめみやのうへにかさなると見えしかは、にはかにあしけのさうやくになられたり。しんかとも、くわの木はらにをしかくしたりけれは、くわの木をふくして、大ようにはきぬをなしたり。わか身よりいつるきぬをあしにて

ふみかためけれは、きぬのまきめはむまのつめに（292）」にたり。きぬを一疋、二ひきといふも、むまよりおこる儀也。かいこのつら、馬ににたるも此いしゆ也。しからは昔もかいこになりてむまもほんいをとけたり。われもなりひらによりそふへきは、くはこにそなるへかりけるとよめる。うたさへひなひたるとは、うたさへいやしき也。さてこそいやしきひなのすまひといふ也。さすかにあはれにやおもひけん、なりひらゆきてねたり。おとこ夜ふかくいてけれは、女わひて、

夜もあけはきつにはめなてくたかけのまたきになきてせなをやりつる

またきになくとは、にはとりのはやくなく事也。（293）」あふしうには、おとこをせなといふ也。又人のいゑを二云也。しかれともくたかけとは、いゑのにはとりなり。よもあけは此とりともを、きつねにはませはやと、あかつきのとりをにくむ也。そのいはれは、そひたきおとこ夜ふかにかへる事、にはとりのしよきやう也。しかれは此くわたいに、きつねにくわせはやと也。おとこきやうへなんまかるとて、

くりはらのあねはのまつの人ならはみやこのつとにいさといはまし

なりひらきやうへのほるとて、此女になこりおしみて、あねはの松といふ事、たゝひとつある松也。（292）」此まつのことく、此ねうはうもひとりあるならは、みやこのつとにいさといはましを、是はけんそく、ふるひおほくありて、きやうにもかるゝとあつかひにくけれは、さてこそあねはのまつのことくならは、みやこへつとにいさといはましをとねかふなり。

第十五段 なてうことなき人の女とは、なんそくせもなきよき女の事也。あふしうのくに、きやうたんにて、なに事なきといふへきを、なてうことなきといへり。あやしき事もなく、心もおもてのことくしやうしきに、心にふしんもなく見えはんへる也。しからはちすしをわけて、ふくちうへゆくみちかな。よくゝ（303）」心のうちを見たきとなり。

しのふ山しのひてかよふみちもかな人のこゝろのおくもみるへく

心のうらおもてなくはんへるを、しのひてかよふみちもかなよゝく人のこゝろのおくを見たきとなり。かきりなくめてたしとおもふは、なりひらにかくのことくほめらるゝは女のほんいなり。されともなりひら、ゑひす心なれは一かたにはさためかたし。さてこそゑひす心みてはいかゝせんとなけくなり。ゑひす心とは、心のさたまらぬうつりやすきをいふなり。（302）」

第十六段 昔きのありつね三代のみかとにつかふまつるとは、しゆんは、にんめい、もんとくなり。此みよには、ありつねえいりよにあひかなひ、てんかを心のまゝにしたかへり。しかれはときめくといふ也。のちはよかはりときうつるとは、四たいめのせいわの御とき、えいりよにそむき、きのふはしたしかりしも、みかとにおそれ、ありつねにうとくなる也。よのつねの人のことくとは、つねの人よりもおとろへたり。人からはいつくしうとは、もとよりくらいある人なれはさういなし。あてはかなる事をこのむとは、しよけいにもくらいある事はかりをこのむ也。まとし（314）」くへてとは、ひろうにしてもくかいはよかりし。むかしのことく、ふへんの事をしらす。しかるあひたとしころあひなれたる女とこはなるゝとは、ふへんのあまりにりへつなり。つゐにあまになるとは、さまをかへたる也。あねのさきたちてなりたるところとは、此女のあね、さかのおくにさうあんをむすひてありし也。それをこそはこくみつるに、いまはひきかへてかのあねをたのみてゆくなり。おとこまことにむつましき事なしとは、なつかしきしうしんもなし。よにあるときのわかれは、かねをうらみ、とりをうらみてむつましかりつるに、（312）」このときのりへつは、せちやうめんほくもなきまてなり。いまはとわかれてゆくをいとあはれとおもふとは、ふたつなくあはれなり。まとしけれはとは、ひろうなれはするわさもなきなり。ねんころにあひかたらふともたちは、むこなりひら也。そのかたへ此りへつの儀をしらせらるゝ也。な

に事もいさゝかなる事なきとは、すこしのうらみもなきと也。そのおくに哥、ありつね、

手をおりてあひみしことをかそふれはとをといひつゝよつはへにけり

かのきうさいにしたしかりつるとし月を、手を(32オ)」おりて見れは、とし月四十ねん也。かくのことくのきうさいにりへつする事おもひやり給へと、なりひらにつくる也。しかれはかのともたち、よるのものまてとりそへおくるとて、

年たにもとをとてよつはへにけるをいくたひきみをたのみきぬらん

とし月は手をおれは四十ねんといふかきりあり。えんしやにまいり、御かけをあをきたる事、かすゝの儀なれは、ゆひもおられす。いくたひきみをたのみきぬらん。そなたかやうになり給ふ事、われ一人のなけき也。かくいひやりたりけれは、(32ウ)」

これやこのあまのはころもむへしこそきみかみけしとたてまつりけれ

みけしは、きよいなり。わうしん天わうの御時、くれはとり、あやはとりとて、二人のてんによくたりて、御衣をおりてみかとへまいらせたり。それはいにしへの事。なりひらよりのよるの物までおくり給ふ事、まことにこれやこのあまのはころもとよろこふ也。よろこひにたへて、又ちうしやう、

あきやくるつゆやまかふとおもふまであるはなみたのふるにそありける

かんるいのなみたのつゆ、たもとにうかひたり。なり(33オ)」ひらのよるのものを、あまのはころもとよろこはれたるを、なりひら、あはれありつねよにありしときならは、このこそてなと、なにしにあまのはころもとよろこはれへき事にはあらす。かくのことくありしをきゝて、かんるいをもよほさるゝ也。

第十七段　此たんにむかしのなき事はしさいあり。此物かたりは、いせといふ女つくりてかきたり。此哥二しゆをかきおとして、こきんにあるをていかのちにかきくはへらるゝとき、いせにおそれて、昔といふしをおかれぬ也。としころをとつれさりけるとは、なりひら三とせしうとのきのありつねのかたへいて(33ウ)」いりせす。そのときはせいわのえいりよにそむくあひた、くかいをおそれてゆかす。三ねんのちせいわゑたいになり給ひて、やうせいの御よになりたり。しかれはくかひひろく、ありつねのところへさくらのさかりにゆかれたり。きのありつねよめる、

あたなりとなにこそたてれさくら花としにまれなる人もまちけり

花はあたなりといへとも、三とせこさるまれ人をまちうけたれは、花はあたにはあらす。されは三とせまちてもつゐにそのきなし。けふもわたくしの心さしにはあらす。花ゆへなりひらきたりたると、(34オ)」ありつね、ちうしやうをうらむる也。返し、

けふこすはあすはゆきとそふりなましきえすはありとも花と見ましや

わたくしは花を見にはさんせす、ひとへにこれへの心さし也。わたくしけふこすして、しせんあすまいりたらは、此さくらゆきとそふりなまし。しからは花といふ物あるへからす。またきよねんのゆきの花はいまたきえすしてのこりたることゝ、人は見ましや。さてはあすもあるへき物をと、なりひらあいさつなり。

第十八段　なま心とは、やさしき心也。おとこちかうあるとは、なり(34ウ)」ひらとこまち、あひたちんしんなり。心みにとておとこのもとへきくの花のうつろへるをやる事、なりひらの心をこまちひき見へきため也。きくの花のうつろへるをおしむ哥をよみてはんへらは、われにとうかんならは、此きくのうつろへることく、かくこのかわるといふ事と心えちんしやの返哥をよまるへし。

くれなひににほふはいつらしらきくのえたもとををにふる

かともみゆ

えたもとをゝとは、えたをとをくはなれてきくのちる心也。此ことくなりひらのわれにうとくならるゝか。いつかたへか御心のふりゆくとおもひて、くれなひ(356オ)」にほふはいつらと、ふしんのうたをよむ也。おとこはしらすよみによむとは、わかさもなきとちんする哥をよまは、とかちんはうにあるほとに、わか心のあやまるにたり。そこの心にはとりあはす、きくのうはさはかりよめる。

くれなゐにほふかうへのしらきくはおりける人のそてかとも見ゆ

よの中に、くれなひはめにたちてみことなる物也。此うへはあらしとおもへは、又しらきくといふ物、くれなひのうへ也。此しらきくにたとへへき物は、こまちのすかた也とほめて、おりける人のそてかともみゆ(356ウ)」といへる也。こまち、さてはわかすかたをほめらるゝはへつてうなきとこゝろへる也。

第百九段　むかしみやつかひしけるとは、二てうのきさきに宮つかひ奉るねうはうの事なるへし。こたちなる人をあひしるとは、是は人のこともたちとしやうくわん也。これはきのありつねのむすめなり。なりひらこれにちきりをこむる事あさからす。ほともなくかれ〳〵とは、ほとなくりへつ也。おなしところなるとは、おなしきんちうの事なれは、りへつとはいへともたちさる事なし。女のめにはみゆるとは、うちよりもよそを見いたすはたやすし、(357オ)」又ほかよりうちを見る事は、しりよなれは、なりひらはうちも見る事なし。女のうた、

あまくもはこゝにふるとおもへとも、又とをくふる物也。なりひらもこゝにありともよりそはねは、あまくもなり。さらは一かたにもとをくなりて、おなし大りのうちなれは、さすかにめにはみゆる物から、さすかきるにもきりゑす、なりひらをみれはこひしき也。おとこ返し、

あま雲のよそにのみしてふることは(357ウ)」わかいる山のかせはやみなり

あま雲のことく、われもよそにふるへきはあらねとも、みかとの御せいはいはけしけれは、それにおそるゝによりて、よそにのみしてふるなり。あま雲もかせにしたかひ、ひとゝころにありかたくとをくゆく物也。わかいる山は、大りおほうち山也。かせはやめは、みかとの御せいはいにおそるゝ也。しかれはとうかんのやうに見えたり。心にふさたなきといへる也といひける。またへつにおとこある人となんいふ也。へつにあるおとこは、みかと此女に御こゝろあり。(358オ)」

第百十段　やまとのくにゝある女とは、きのありつねのむすめ也。よはいてあふとは、しのひてさんくわいなり。さてふうふとなりてほとへてのち、又きやうへ宮つかひにのほる也。やよひはかりに、かやてのはつもみちを見いたして、そのもみちにつけてきうさいのもとへうたをおくる也。みちよりもいひやるとは、やはたよりの事也。やはたは、きやうとやまとのはんと也。

きみかためたをれるえたは春なからかくこそあきのもみちしにけれ

此もみちもあきこそあるへきに、おもひのほか(358ウ)」なるやよひにあるもみちは、まことにさためなきことはり也。此もみちのことく、るすちうに御こゝろいかやうにかうつりかはるへき。此さためなきもみちを見るにつけても、御心おほつかなし。きみかためたをる心は、はるのまゝにかはる事なしといひつかはしたり。返しは、きやうにきつきて、やまとよりきうさい返哥もてきたる。

いつのまにうつろふいろのつきぬらんきみかさとにははるなかるらし

きみかさとははるなかるらし。われをはやあきになされたりと見えたり。いつのまに御かく(359オ)」こうつりかはりたるよ。そのはうからのもみち、おもひのほかなる事なれは、そなたは

われにとうかんかとうらみてよめる。

第二十一段　むかし女はかしこくおもふとは、こまちをなりひらねんころにする也。こと心なかりけるとは、なりひら、こまちにへつてうなし。いかなる事かありけん、いさゝかなるきに、こまちなりひらをうらむる也。こまちかうた、

いてゝいなは心かろしといひやせんよのありさまを人はしらねは

とういのことは、いさゝかなるうらみと人はおもふ也。（388ウ）」とし月のないきにうらみあるをは人はしらねは、わかいてゝゆけは、しよ人心かろしとわかあたなたつへし。しかれともよのつねならぬないきにうらみはんへれは、いてゝゆく也。此哥をかきつけてこまちゆきたるに、此哥をなりひら見つけて、さてもかくこにへつてうなきを、なにゝよりて此あつかひおほつかなき也。けしう心をくへきとは、けしうはいやしき也。いかなれは、いやしけに心をくへきにもあらす、たかひにいとまをこひて、のり物にてもゆかぬそと、なりひらいたくひたん也。しかれともいとゝなくといへる也。いつくにもとめ（389オ）」ゆかんとは、こまちかゆくゑをちうしやうたつねんとのき也。かとにいてゝとみかうみ見るとは、こまちかゆくゑを、かなたこなたをなりひらたつねらるゝき也。いつくをはかりともおほえねは、かへりて、

おもふかいなきよなりけりとし月をあたにちきりてわれやすまひし

とし月はおしめともおもふかいなく、くわういんやのことしとてくれてゆく物也。こまちをねん比にしたるは、とし月をおしむことく、こまちかかくこきよくなしと、こまちをかみのくはうらみて、（392）」下のくに、あたにちきりてわれやすまひし、さためてみにとつておほえねとも、わかかくこにもあたにちきりてすみたる事あるへし。こまちかかくこはかりちかふにはあらす。わかかくこもちかふたるへきとて、こまちかとうりにおとしつくる也。又ちうしやうの哥、

人はいさおもひやすらんたまかつらおもかけにのみいとゝ見えつゝ

人はいさとは、こまちはわれをおもひやすらん、又おもはてかあるらん、いさしらす。われはこまちにたいし、とうかんなけれは、こまちかおもかけを、ゆめにも（400オ）」うつゝにもこれはかりを見るといふ事を、おもかけにのみいとゝ見えつゝとよめる。たまかつら、女の惣みやうなり。此女いとひさしくねんしわふるとは、こらひわふるなり。こまちかうた、

いまはとてわするゝくさのたねをたに人のこゝろにまかせすもかな

わすれくさのたねを、人の心にはまきたくもなし。しかれはわか事をわすれくさに、なりひらなさるへし。わか心にわすれくさのたねをほしきと也。ちうしやうこひしきしうしんを、わすれくさになすへきと也。さてこそ、わすれくさ人の心にまかせ（402）」すもかなとねかふなり。又おとこ返し、

わすれくさうふとたにきく物ならはおもひけりとはしりもしなまし

是はわすれくさのたね、こまちかかくこにうへさる事あらはれたり。しかれはわれをおもひけりとはしられしを、わすれくさのたねなきによりて、われをおもふいしゆあらはれたり。又〳〵ありしよりけにいひかはすとは、もとよりもすくれてあひたよくなる也。すくるゝといふしを、けにとよまするなり。なりひら、

わするらんとおもふ心のうたかひに（411オ）」ありしよりけに物そかなしき

此あひたは、われこまちにふさたしたり。いまは又こまち、われをすつるやと、しうしんふかきによりて、ありしよりけに物そかなしきとよめる。返し、こまち、

なかそらにたちゐるくものあともなくみのはかなくもなりにけるかな

なかそらのくもとは、うみにも山にもつく雲はたよりあり、は

ん天に一むらそつとうきたる雲はたよりなきくもなれは、はん天のくもといへる也。女はいつれもなかそらのくもなり。女に三かいのかき（412）」もなしといふことく、たよりなき物なれは、なりひら心さたまらす、うたかはるゝときもあり、又しうしんのときもあり。かくのことくさたまらぬおとことはおもへとも、女はたよりなき物なれは、かやうのおとこにもあいたいする也。さてこそ、みのはかなくもなりにけるかなと、わかみをあちきなくおもひてよめる。とはいひけれともをのかよゝに、としをふりとしよれは、あひたも物とをになる也。

第二十三段　むかしはかなくてたえにけるとは、ほともなくりへつしたり。此女そめとのゝないし也。なをやわすれさりけん、女、（423）」

うきなから人をはえしもわすれねはかつうらみつゝなをそこひしき

なりひらわれをすてらるれは、ちうしやうのかくこうらめしき事あさからす。さりなから、ちうしやうはとうかんありとも、われはちうしやうの事えしもわすれぬとは、いよ〳〵わすれさる也。かつうらむるとは、そとうらむる也。又ふかくうらむへきことにはあらす。われふかくこゆへ、ちうしやうりへつなれは、わかみのほとをはつよくうらむ也。なりひらをはかつうらみつゝとよめる也。されはよといひて、ちうしやうのうた、（424）」

あきのよのちよをひとよになすらへてやちよしねはやあくときのあらん

秋のよのなかきをちよになしてかたるとも、いよ〳〵なこりおしむへきといふことを、やちよしねはやは、いよ〳〵ねは、あくときのあらん。返し、

秋のよのちよをひとよになせりともことはのこりてとりやなきなん

ちよを一夜になしてかたるとも、ことはゝのこりてとりなき、よあけへし。ましていはんやすこしのあひたかたりては、なを〳〵ことは残りてとよめる。

第二十三段　いなかわたらひとは、いなかすみする事也。人のことも（433）」とは、なりひらも五、女も五なれは、はつかしきせんあくもしらす、いつゝによりそひあそふ也。おとなになるとは、女も男もたかひにはちる也。おとこは女をえめといふ事は、えたしといふ事也。又一せつは、此女よきとほめたるきもあるへし。女は此おとことおもへとも、たかひのおやあれは心のまゝならす。そのゝちはおやはへちのえんしやとおもへとも、はやわらはへよりもちきたんにふうふのやくそくあり。となりの男のもとよりとは、ちうしやうの事なり。女のかたへのうた、

つゝいつのいつゝにかけしまろかたけ（432）」すきにけらしないもみさるまに

つゝいつは、十五也。まろかたけとは、われかたけといふ事也。わかせいもかくのことくのひて、いつゝよりもたかくなりたり。さてこそ、すきにけらしなといふ也。いもみさるまにとは、女か見ぬまに、われもかくのことくせいしん也。はやよきちふんといへるうたなり。返し、

くらへこしふりはけかみもかたすきぬきみならすしてたれかあくへき

ふりはけかみといふ事、たいたうには、おとこのなき女、かみをふたつにゆひさけてふりはけておく也。（434）」しかれはおつとのなき女としる。ありつねのむすめのかみも、おとこなけれはふりはけかみなり。おとこのいてくるよ、かのかみをひとつにおつとかまきあけ、そのゝちかみをひとつにゆふ也。さてわれふりはけかみをは、なりひらになくてはたれかあくへきと、なりひらをまつといふ哥也。ほいのことくとは、ほんいのことく也。としころふるとは、ふうふとなりてとしをふるなり。女おやなくたよりなきとは、此女のおやもなくみなしことなる也。なりひら、かはちかよひをもとめられたり。なりひらの心たのもしからす。此女、おやもよにあるときは（442）」そんきやうし、みなしことなるとき、かはちかよひもとめらるゝ事、にあ

はす。みなしことなられたらは、いよ〳〵まへ〳〵よりねんころありてこそ、くかいしかるへき也。此もとの女あしとおもへるけしきもなくいたしあるとは、ちうしやうのきうさい、なりひらかわちかよひをするに、あしといふけしきもなく、いよ〳〵ねんころにかわちへいたしやる也。こと心ありてやと、ちうしやうおもはれける。かわちかよひにふきやうのけしきなきは、わかるすにへつてうのかくこありとおもはれたり。さるほとにかはちへゆくよしにて、せんさいにかくれて女のかくこ（45オ）」を見るに、へつの心はなく、いとようけそうする。まゆをはきかねをつけ、ちうしやうのみちのきとうを、此女心にいとなむ也。そのゆへ女といふしのうへに、かふりといふしをかけは、やすしといふし也。かふりなくて女といふしは、人ほろふとよませたり。しかれはいとようけさうするは、ちうしやうのみちのきたうなり。かの女の哥、

かせふけはおきつしら波たつた山よはにやきみかひとりゆくらん

むかしたいたうよりしてぬす人二人きたり。一人をはりよくりん、ひとりははくらう、この二人のぬ（45ウ）」す人、やまとかはちのさかいにふして人をはきとり、人をころしらんにうする也。此あくしよをとをりて、ちうしやうかわちへゆかるゝに、女あしとおもへるいろはなく、ちうしやういつの日のいつのときか、さいなんにあはれへき事をおもひやりて、おきつしらなみたつた山よはにやきみかひとりゆくらんとなけかれたり。なりひらこれをきゝて、かきりなくかなしとおもひ、われなからわか身をあさましくおもひ、女の心をはちて、かわちかよひをおもひとゝまり、もとの女におもひつく也。これ女ほうのめいしんにより、なりひらのかくこをもとゝのふる也。まれ〳〵たか（46オ）」やすにきて見るとは、さい〳〵きてみる也。はしめ心にくゝもつくるとは、此女うちつけはきやしやをつくりたれとも、しやうとくいやしき女なれは、したいにほんしきのいやしき心あらはれ、てつからいひかいとりて、けこのうつはものにもるを見て、中将心うかり、かわちかよひをやめられたり。しかれは此女、なりひらのすまるゝやまとをみて、

君かあたり見つゝおをらんいこまやま雲なかくしそあめはふるとも

中将のかたの雲をなりともかたみに見はやとおもふに、なみたのあめかきくもれは、かたみの雲さへ（46ウ）」めに見えす、いよ〳〵ちうしやうこひしき也。やまと人からうしてこんといふは、しんらうしてくへきとなり。よろこひてまつに、たひ〳〵ちうしやうこさりけれは、女のうた、

きみこんといひしはかりにすきぬれはたのまぬものゝこひつゝそぬる

中将われをたのまぬ物也。われはちうしやうをたのみてこひつゝそぬる。かたおもひなりとはいひけれと、おとこすますなりとは、なりひらこす。

第二十四段　むかしおとこかたいなかにすむとは、やまとのくに也。わかれおしみてみやつかひにいてゝのちなりひら（47オ）三とせかへらす。まちわひたりけるとは、もとより中将をまちわひたる也。いとねんころにいふ人と、こよひあはんと此女しゆひしたり。此いとねんころにいふ人は、せいわの御こつねやすのしんわう。なりひらこすはちきらんと御しゆひあり。はや三とせこさりけれは、さらはといひて、つねやすのしんわうにあいたいする也。昔はおとこおんなのしゆひは、三ねんをかきりにまちて、三ねんすくれはせひをいはす、女別の物にあふなり。つねやすのしんわうとねたるに、此おとこきたりけるとはちうしやうきたり。此とあけ給へとちうしやうたゝく也。しからはうちより（47ウ）」哥をよみていたす。

あらたまのとしの三とせをまちわひてたゝこよひこそにひまくらすれ

此女三とせのしゆひなるを、こよひ一よまちこしては、しゆひにまかせてよかるへきを、一よまちかねてこよひさんくわいする也。あすのよは人にあひてもくるしからす。たゝこよひこそ

にいまくらすれ、まへ〳〵はさもなかりつるとちんすれとも、此おとこまことにせす。中将かへらんとおもひて、

あつさゆみまゆみつきゆみとしをへてわかせしかことうるはしみせよ（488オ）」

ゆみを三ちやうあけられたるは、三ねんの三しゆんをいふへきためなり。わかせしかことうるはしみせよは、われにせしかことくこれにもちきれ、われは二たひこしとよめる。又女返し、

あつさゆみひけとひかねとむかしよりこゝろはきみによりにしものを

ひけとひかねといふは、おさなきときはまた心もひきてひかれす。しからはそのときよりなりひらとみつからは、いまたふさたなきなり。むかしより心はきみによりにし物を、女はおつとにあはさるは心ほそき物也。いまもむかしのことく、心はきみによりにし（488ウ）」物を、かの女おとこにこんはう也といひけれは、おとこはかへりぬ。女しりにたちてをひゆけとも、女は男におとるによりて、中将にをひつかす、せいすいのある所へふしたり。そこなるいはに哥をかきつけける。

あひおもはてかれぬる人をとゝめかねわか身はいまそきえはてぬめる

あひおもはぬとは、わかちうしやうをおもへとも、中将われをおもはす、しかれはかたおもひ也。かれぬるとは、りへつ也。わか身はいまそきゆるとて、しやくそんの四くのもんをかかれたることく、おゆひのちしてかきつくるなり。（489オ）」

第二十五段　むかしおとこあはしともいはさりける女とは、こまちか事也。あはしともいはぬは、もつともさんくわいといひて、さすか又うちとけもせぬ也。ちうしやう、

あきの野にさゝはけしあさのそてよりもあはてぬるよそひちまさりける

あきの野のさゝはけしたもとは、あさからすぬるゝ也。それよりもおもふ人にあはてぬるよ、たもとのぬるゝは、さゝはけし袖にはまさる也。ひちまさるはぬれまさるなり。又いろこのみの女返し、

見るめなきわか身をうらとしらねはやかれなてあまのあしたゆくくる（490ウ）」

こまちか返し、みるめなきとは、さんくわいもなき事也。うらとおきたるはみるめのゑんこ也。かれなてとは、たえすあま人のゆきかよふ也。あしたゆくくるとは、あしのたるきほとゆきかよふ也。此ことくなりひら、こまちかところへいている也。

第二十六段　むかしおとこ五てうあたりなる女とは、二てうのきさき、えゝすなりにける事とは、えかたき女の事なり。わひたりける人とは、そめとのゝきさき、なりひらか二てうのきさきをとてもえかたき女なるを、しうねんをやめよかしと御わひことあり。しかれとも中将うたをもつて御返し申、（501オ）」

おもほえすそてにみなとのさはくかなもろこしふねのよりしはかりに

しはかりにかくのことくおほせあるへきとは、ゆめ〳〵おもはすとなり。もろこし舟、にほんのみなとへつけは、たからよるあひた、みなともきふくよろこひさはく也。そのことく、そめとのゝきさきの御わひことをうけたまはつて、心のうちもろこしふねのよりしはかりにとさはく也。

第二十七段　むかしおとこ女のもとに一よゆきて又もゆかぬとは、これは二てうのきさきへもゝよもまいりたく侍れとも、よをはゝかるあひた、一よゆきて又もゆかす、（502ウ）」心はしうしんはかり也。きさきもおなし御心也。女のてあらふところにぬきすをうちあるは、はんさうたらいのうへに、わたしといふ物をうちわたし、そのうへに三くそくをおき、かねをもつけ、てをもあらふなり。かねつくるときの三くそくは、しやうつ三わ、ひとつはちやうつのこ、一はふしかね入もの也。そのわたしのしたのみつをぬきすといふ也。たらいのかけに見ゆるとは、二てうのきさき、わかおもかけみつにうつるを、よの人のあるとこゝろへて、

われはかり物おもふ人はまたもあらしとおもへはみつのし

たにもありけり（51オ）」

せしやうになりひらゆへ物おもふ人は、われひとり也と御なけきありつるに、みつのしたにも人のあるを御らんして、わかおもひをなくさませ給ふ也。かのこさりけるおとこは、なりひら也。此男たちきゝて、

みなくちにわれや見ゆらんかわつさへみつのしたにてもろこゑになく

みつのしたにもあるとうけたまはるは、われやみゆらん、きさきの事をおもひしつみ奉るあひた、みつの下にてかわつとわれと、いつももろこゑになきくらふるなり。みなくちとは、みつくちのかわつひとつなけは、たことのかわつもろこゑになきたつ也。（51ウ）」

第二十八段　むかしいろこのみなる女いてゝいにけれは、こまち、ちうしやうをうらみていてゝはしる事也。ちうしやうのうた、

なとてかくあふこかたみになりにけんみつもらさしとむすひしものを

なとてかくとは、なにとてかくのことく、こまちかかくこうつりやすきそといへる也。あふこかたみとは、あふ事のかたき身になる也。まへ〳〵よりはみつもらさしとむすひしなかを、かくのことくなりゆく事、身にとりてはおほえす。

第二十九段　むかしとうくうのとは、みかとたい〳〵おかたすみ也。（52オ）」なかにもこれはせいわのおかたすみ也。にようこは、二てうのきさき、はなのかにめしあつけらるゝとは、二てうのきさき、二十のかを三月ひとひになさるゝ也。そのひのやくをちうしやうにおほせつけられたり。かといふは、十〳〵にあたるとき、たんしやう日にかといふよろこひあれは、その人のいのちもなかく、いせいもある也。ちうしやうの、その日のやくをうけたまはり、けふ一日はいかにもなかゝれかしとねかふところに、けつくはやく暮ゆく也。いかにといふに、廿のかにあひ奉るへき事は、ふたゝひあるましき也。しからはけふのひのなこりおしくおもひ給ふ間、よめる。（52ウ）」

花にあかぬなけきはいつもせしかともけふのこよひにになるときはなし

はなをはいつもおしめとも、花は又らい〳〵ねんも見る事あるへし。廿のかはけふはかりなれは、さてこそけふのこよひになるときはなしと也。

第三十段　むかしおとこはつかなりける女とは、さんくわいのみちとをき也。女はそめとのゝきさき。

あふ事はたまのをはかりおもほえてつらきこゝろのなかく

見ゆらん

たまのをは、いのちの事也。いのちほとみちかくすくなき物はなし。此いのちのことく、二てうのきさき（53オ）」にさんくわいはみしかくすくなき物也。さてこそたまのをはかりおもほゆるとよめる。あふ事はすくなく、つらさのおもひはなかし。さてこそつらき心のなかくみゆらん、あふことはたまのをはかりとよめる。

第三十一段　むかしみやのうちとは、大りのうちの事也。こまちのつほねのまへとは、二てうのきさきのおつほねの前也。なりひらこゝをとをるに、いせといふ女、ちうしやうを見て、とくしゝてくさはになるを見たらはよかるへきと、いせかなりひらをのろふなり。しからはなりひら、うたをもつてへんたうあり。

つみもなき人をうけへはわすれくさ（53ウ）」をのかうへにそあふといふなる

つみもなきとは、とかもなきと也。人をうけへはとは、人をしゆそせはといふ也。かくのことく人をしゆそせは、又けんしやくおほんにんなれは、そのほうにとくしゝて、へうしよよりもわすれくさおへへしと、のろひかへす也。へうしよのくさを、わすれのくさといふ也。ねたむ女もあるとは、二てうのきさき、いせをよまひことあり。

第三十二段　むかしものいひける女とは、こまち也。こまち、

せきもりにあさましくなりて侍るを、なりひらあはれにおもひて、しつのをたまきのごとく、いま一たひ(54オ)」くりかへして見はやとよめる也。といひけれはなにともおもはすやありけんとは、としのよりおとろへるは、われはかりにてもなし、人ことの事なれは、はつかしきともおもはすなり。

いにしへのしつのをたまきくりかへしむかしをいまになすよしもかな

とありけれは、なにともおもはすやありけん。

第二十三段　昔おとこつのくにむはらのこほりにかよひける女とは、きのありつねのむすめ、中将のためにはさいしよなり。しんふきのありつね、ならのこほりを地行して、これにしんふすまるゝあいた、おやの事なれ(54ウ)」は、ちうしやうのさいちよ、さいくいていりあり。此たひゆくは、又かへるましきやうにけしきあしかりしかは、ちうしやう女の心をやはらけんとて、

あしへよりみちくるしほのいやましにきみにこゝろをおもひますかな

たかくしけりたるあしのまよりしほのみちくるは、めには見えぬ也。そのことく、いつものきうさいなれは、おもふふりをはうへにはあらはさねとも、しほのみちくることくに、いやましにたれよりもふたつなくきみをおもひますかな。いかにしてふきけんなるとよまれたり。返し、(55オ)」

こもりえにおもふ心をいかてかはふねさすさほのさしてしるへき

こもりえとは、くさのかけなとにたまりみつをいふなり。それはさほをさせは、ふかきあさをしる也。なりひらの心にはさほもさゝれねは、われにとうかんのあるなきもしられさると、けんそによみたり。いなか人のよしやあしやとは、うたの返しをしたるはよきことにてもあり、又あしき事にてもあるへし。すきたるはたらはさるにはしかし。おとこには女はまけたる事よし。

第二十四段　むかしつれなかりける女とは、四てうのきさき、ゆき(55ウ)」ひらのむすめ、ちうしやうのためにめい也。さんくわいなき女なれは、つれなきとかきたり。中将、

いへはえにいはねはむねにさはかれてこゝろひとつになけくころかな

いへはえにとは、さしいてゝこひしきといはんとすれは、えんきんの事なれはいはれす、又いはすしてつゝめは、むねのうちのおもひくるしき也。えんしやのあいたをおもへは、たへもらす事なし。さてこそ心ひとつになけくころかなといへる也。おもなくてとは、めんほくなくてといへる也。

第二十五段　むかし心にもあらてたえるとは、おもひのほかに(56オ)」りへつ也。此女二てうのきさきにておはします也。

たまのをゝあはをによりてむすへれはたえての後もあはんとそおもふ

たまのをとは、すゝのをのたえてみたれたるは、二たひよりあひかたし、されともいとをよりあはせてむすへれは、すゝのたま、又一しよによりあふ也。これをみれは、わかなかも、りへつなりとも又あはんとそおもふと、すゑをたのまれたり。